マーク狩猟記

STORM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マーク狩猟記

【Ｎコード】
Ｎ４７０８Ｃ

【作者名】
ＳＴＯＲＭ

【あらすじ】
大自然で飛竜を狩る者・ハンター。これはハンターをしている男、マークの物語である。注・この小説はギャグをメインとしています。

HUNTING　0　プロローグ

ここは辺境の村。
でもその村は現代とは違う世界だった。
その世界にはたくさんの生き物で溢れていた。

その中で頂点に立つ者、それは飛竜。
彼らは大きな翼を持ち、空を駆け、大地を走る。

それらを狩る者、すなわちハンターである。

この話はその辺境の村に生きるひとりのハンターについての物語である。

彼の名はマーク。
武器はハンター・カリンガを使っている。
ハンター歴は8年にもなる。

彼のハンターライフをつづった物語をお楽しみください。

HUNTING　0　プロローグ（後書き）

１話１話は短いですが数は異様に多いです。
長く読んでくだされば幸いです。

HUNTING　1　出撃

「アプトノスでも狩りにいくか！」
マークは愛剣のハンター・カリンガを腰につけました。
マークは村長にアプトノスを狩る許可を貰いに行きました。

「マーク、お主もそろそろランポス程度は狩れなくてはやっていけないぞ。」
「んだとジジイ！　オレ様がモスとアプトノスしか狩れないのを知ってるだろ！」
マークは勝手にキレ始めました。
すると後ろの方から「あいつ、弱いなぁ。」とたくさんのハンターがいいました。

マークが怒鳴っていると誰かに声をかけられました。
「あ、マークだ。」
振り向くと少女が立っていました。
マークの幼なじみのナッツです。
マークは彼女より５歳年上です。
しかしマークは彼女よりハンターランクが５０下です。
マークの武器はハンター・カリンガ、ナッツの武器はゴールド・ヴァルキリーです。
マークは年下より弱いことにいつも腹をたてていました。

みんなに悪口を言われ、ついにランポスを狩る決心をしました。
「それじゃあ、行ってくる（逝ってくる）ぜ！」
精一杯カッコつけてマークは旅立ちました。
見送りに来たのは村長だけでした。

翌日
森と丘についたマークは馬車で酔っていました。
かなり酷い顔で今にも吐きそうでした。
「クソジジイ、覚えてろ・・・。」
マークはそれだけいって朽ち果てました。

マークは起き上がりました。
「よし、いくぞ！」
腰には愛剣・ハンター・カリンガをつけて狩猟場に走っていきました。

HUNTING　2　青き狩人

マークは携帯食料を食べながら歩いています。
「ランポスは確かこっちだったかな？」
マークは警戒しながら歩いていきました。
普通のハンターでもここまで警戒しないだろうというくらい警戒していました。

ランポスがいました。
マークはハンター・カリンガを強く握りしめます。
マークは吼えながら突撃していきます。
ランポスはマークの存在に気付き、威嚇しましたました。
「キエエエエエエエ！！！」
マークは奇声をあげながらランポスを縦に一閃しました。
ランポスはその攻撃をバックステップで避けました。
勢いあまって剣が地面に刺さりました。
「抜けない！？」
マークは焦っています。
ランポスが後ろからかみついてきたり、引っかいてきたりします。
「死ぬってマジ死ぬって！！」
マークは肩を引き裂かれ、腹にかみつかれ、肉を抉られました。
「うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！　いてぇぇぇぇぇ！！！」
マークは力尽きました。

死に際に猫の声が聞こえたような気がしました。

気づいたらキャンプでねていました。
キズは完全に回復していました。
何故か抉られたはずの肉も復活していました。
ギルドの医療技術は凄まじく高度でした。

再びキャンプから出るとアプトノスがいました。
さっきやられたので復讐する前に怒りをこいつらにぶつけることにしました。
「うりゃあああああ、死ねえええええい！！！！！」
アプトノスは瞬時に尻尾を動かしました。
するとマークの腹に直撃しました。
「ぐふっ！」
マークは吐血して倒れました。

HUNTING　3　謎のジジィ

アプトノスは川の向こうへ走っていきました。
「アプトノスの分際でぇぇぇ！！」
マークは剣を杖にして立ち上がり叫びながら高台を飛び越え走り去りました。

ランポスのところに行きました。
「なっ！？」
ランポスは全滅していました。
「誰だ、オレ様の獲物を奪った奴はっ！？」
はぎ取った後、復讐？　してやろうと探しました。

少し歩き回った後、ランポスを狩った犯人を見つけました。
「なっ、おまえは！？」
赤い顔のジジイでした。
ジジイはなぜか戦闘態勢にはいりました。
マークはハンター・カリンガをかまえて切りかかりに行きました。

気づくとキャンプで寝ていました。
横には武器とアイテムポーチがありました。
「・・・・・あの赤いジジイ・・・強い・・・。」
マークの正直な感想でした。

村に戻るとみんなが「うわっ、帰ってきたよ・・・・・。」系の目で見てきました。
マークは腹が立ち、「おら、倒してきたんだぞ！！　すごいだろ！！！！」と叫びました。
村長にランポスの皮を見せると「マジで倒してきたのかよ・・・・。」的な目で見られました。
報酬を受け取るとマークは呟きました。
「報酬これだけかよ・・・・。」
そう呟き家に帰りました。

翌日、マークは少ないお金を使って武器を強化することにしました。
ハンター・カリンガ改にしました。
帰ろうとするとナッツがいました。
「これあげる。ランポス倒したお祝い。」
ハンター・カリンガ改の強化版、アサシン・カリンガの強化素材でした。

HUNTING　3　謎のジジィ（後書き）

赤いジジイは山菜ジジィのことです。

HUNTING　4　奪われた剣

マークはアサシン・カリンガに強化しようとしました。
するとあたりが急に暗くなり始めました。
「「レア度４以上のアイテムは受け渡しできんのじゃぁぁぁぁ！！！」」
村長がライトと共にグロい顔で叫んでいました。
その声にはエコーがかかっていました。

明るくなるとマークは大変なことに気が付きました。
「オレ様のハンター・カリンガがないっ！？」
ハンター・カリンガと強化素材が消えていました。
マークは武器を失いました。
途方に暮れているとボーン・ククリという骨素材片手剣再弱武器が置いてありました。
剣には紙が貼ってありました。
「えっとなになに〈ハンター・カリンガを返して欲しければ密林エリア１０に来い〉か。」
色々考えた末、マークは腰にボーン・ククリを装着して密林に向かいました。
「オレ様の～♪愛剣返せやこの野郎～♪」
マークは謎めいた歌を歌いながら船に乗り込みました。
密林に着くまで船で半日です。

密林に着きました。
マークは完全に船酔いしていました。

「ウェェ・・・酔っちまったよ・・・。」
マークはフラフラしながら立ち上がりました。
そして支給品ＢＯＸをあさって携帯食料を取り出しました。
「うおおおおお、こうなったら自棄食いしてやる！！」
マークはそこに存在した携帯食料を全て食い尽くしました。
マークは準備が終わった後密林に駆けていきました。

「何だよこの蟹！！」
マークは砂浜でヤオザミに追いかけられながらエリア１０に向かいました。

ＨＵＮＴＩＮＧ　４　奪われた剣（後書き）

読者数１００人になるのですが未だに評価・感想が一件も無いので、読んでもらうだけでもありがたいのですが余裕があれば感想を書いて欲しいです。
いい評価でも悪い評価でも喜びますので遠慮なく書いてください。

HUNTING　5　エリア10の戦い

エリア１０には何故か山菜ジジィがいました。
右手に杖を、左手にハンター・カリンガを持っています。
マークはそれを見るなり「てめぇ、その剣返しやがれ！」と怒鳴りました。
山菜ジジィは剣を投げました。
凄い速さで飛んでいき、マークの足元に刺さりました。
「こ、こいつ・・・できる！？」
山菜ジジィは手にしている杖で挑発しました。
マークはハンター・カリンガを持つとジジィに突きつけました。
「お主、それで勝ったつもりかの？」
いかにも馬鹿にした口調だったのでマークはキレました。
「オレ様を・・・バカにするなあああああ！！」
マークはククリを取り出し鬼人化しました。
しかし、鬼人化した瞬間山菜ジジィは飛んできて杖の尖った方でマークの腹に突き刺し、そのまま抉りました。
「ぐあああ！」
マークは意識不明の重体に陥りました。

気づくとキャンプにいました。
相変わらず凄い医療技術は抉られた腹も元に戻っていました。
ククリはどこかに消えましたがマークはカリンガが戻ってきて大喜びです。
ふと、横を見ると何かの鱗と甲殻が大量に落ちていました。
「桃色だからイャンクックの甲殻か。」
マークは黙って甲殻を暫く眺めていました。

「よし、帰ったらクック装備を作ろう！！」
マークはニコニコ顔で帰路につきました。

帰ったら早速防具を作りました。
しかし、お金がないので作れるのはひとつだけと言われたので腰だけ作りました。

HUNTING　6　幻獣の騎士（前書き）

いつもながら不定期です。
感想待ってます。

HUNTING　6　幻獣の騎士

マークは防具を作ったことにより自信がでました。
「レイアを狩りにいくぜ！」
マークの声に反応したハンターたちは「無理だろ」的な目を向けていました。

密林にて

マークは支給品を覗いて携帯食料を取り出しました。
「オレ様だって飛竜一匹くらい狩れるわ！」
携帯食料を口に入れたままで喋ったのでよく聞こえませんでしたが恐らくああ言ったのでしょう。
ちなみに飛竜の数え方は一頭なのでマークはバカです。

砂浜にでるとヤオザミではなくランポスがいました。
「ふはははは、単純な攻撃しかできない屑め！」
マークは数日前までランポスを狩ることができなかったくせにそんなことを言い始めました。

ランポスが全滅したところでリオレイアが降りてきました。
「３０秒でケリをつけてやる。」
マークは剣を抜くと斬りかかりました。
「うおおお、死ねぇぇぇい！！」
レイアはマークに気づいたらしく威嚇しました。
マークは完全にビビって動けなくなっていました。
「マジかよ！？　足が動かねぇ！？」

レイアは突進してきました。
マークはビビって動けません。
すると角笛っぽい音が聞こえました。

音の先には召雷剣【麒麟王】を背負った女性がいました。
その女性は剣を華麗に振り回し、レイアを斬りつけていきました。
マークはその姿に見とれていました。
理由は彼女の装備がキリン装備だったからです。

マークは急に海に落ちました。
何がおきたか理解するにはホバリングしているレイアを見れば十分でした。
理解した後、マークは海に沈んでいきました。

HUNTING　6　幻獣の騎士（後書き）

女のキリン装備と言えば言わずと知れた大量露出装備ですね。
あの装備露出抜きにしても結構好きです。

HUNTING　7　新たなる目標（前書き）

更新遅れました

HUNTING　7　新たなる目標

マークはキャンプに横たわっていました。
思ったより重傷で体が思うように動きません。
「あのクソネコ！　何で今回は完治してねぇんだ！」
マークは一人でキレていました。

マークは緑色の物体と隣に寄り添い、眠る女性をみつけました。
緑色の物体は言うまでもなくリオレイアの亡骸です。
そして女性の方は全身キリン装備のものすごくエロい格好をしていました。
「この人は１９か２０・・・若いねぇ♪」
マークは狩りの腕は屑ですが、エロいことは超一流です。

マークが凝視している間に女性は目を覚ましました。
「・・・ん、あ、目覚めた？」
マークは紳士的な顔で「はい、私は不死身ですから」
と答えました。
その声と顔は第三者視点でみるとものすごくグロテスクです。
「わたしは、ライザ。街に戻る間に雌火竜がいたから狩った。残りの素材はどうぞ」
「有り難き幸せ・・・それからオレ様の名はマークだからな！」
マークはライザの豊満な胸を凝視して言っていました。
ライザは嫌気がさしたのかすぐに別れを告げ、走り去っていきました。

マークは村に帰ると皆に「マジでレイア狩ったのか！？」と、しつこく聞かれました。
あまりにもしつこ過ぎるのでマークは本当のことを話しました。
「やっぱなー。」
「マークがワイバーンを倒せるわけないじゃん。」
みんなはものすごく呆れた顔をして立ち去っていきました。
「うぜえええええええ！！後で絶対見返してやる！！」
ようやくまともな目標ができたマークでした。

EXTRA HUNTING 1 三年前の大海原（前書き）

番外編です。

EXTRA　HUNTING　1　三年前の大海原

マークは密林で魚釣りをしていました。
「カジキマグロ釣ってやるぜ！」
カジキマグロは半端ないデカさを誇る魚です。
マークは釣りエサを忘れたので採取した釣りカエルを投げ込みました。
普通の魚は釣りカエルが大きすぎて食べることができません。
マークはやはりバカでした。

暫くすると釣れないはずの釣りエサに獲物がかかりました。
「でけぇ！　カジキマグロきたっ！」
カジキマグロは釣りカエルで釣れません。
マークは釣り上げてみると尋常じゃないデカさの魚が出てきました。
大きさは大型飛竜級です。
「なんだ、これ！？」
巨大魚は口をあけました。
マークはその瞬間目の前が真っ暗になりました。

気づくとキャンプで寝ていました。
「なんだあれ！？」
マークは大声をあげて叫びました。

今日のマークの収穫は釣り上げたときに落ちた巨大魚の鱗だけでし

た。
鱗を村長に見せたところガノトトスという魚竜の鱗ということが分かりました。
マークはガノトトスに復讐を誓いました。

マークは金欠だったので鱗は売りました。
採取クエストより高く売れたので村長を軽く恨みました。
この金でハンターナイフ改をハンターカリンガに強化しました。

「ふはははは！！この華麗な刀身、鈍く光るボディ！！素晴らし過ぎる！！」
注・ハンターカリンガは弱い部類の武器です。
マークは三時間程カリンガを眺めた後、自分の家に帰っていきました。
それまで加工屋の前にいたので店主にも他のハンターにもかなりの迷惑がかかっていました。

三年後、灼熱の海で更なる進化を遂げたガノトトスに出会うということを彼はまだ知らない。

HUNTING　8　轟竜の裁き（前書き）

今回は無理矢理詰めていますが気にしないでください。

HUNTING　8　轟竜の裁き

マークは防具を作るために素材を持っていきました。
店主はレイアグリーヴが作れるといっていました。
マークは作ってもらおうとすると金が足りないといわれました。
マークは金集めに専念しました。

数日後

村の裏山に剣が刺さっているのを見つけました。
「これって噂の封龍剣か！？」
勿論、抜けませんでした。

マークは気になったので村長に聞きました。
「ティガレックス倒せば抜けんじゃねぇ？」
マークはその日から雪山で特訓することにしました。

更に数日後

金が増えたマークは武器を一段階強化しました。
「アサシンカリンガってながいな・・・。」
というわけでマークはアサカリと呼ぶことにしました。
「これならレックスにも勝てる・・・かもしれない。」
しかし、マークに轟竜討伐のクエストは来ないのでした。
代わりにポポノタンを取りにいきました。

雪山はいつもと雰囲気が違いました。
「ポポがいねぇ・・・。」
ポポを探していると後ろから何かが落ちてくる音がしました。
「・・・レックス？」
後ろにいたのは轟竜ティガレックスでした。
轟竜はマークにすさまじい勢いで突進してきました。
「おい、おい、よせっ！？」
マークは横とびで回避します。
そんなことを１０分程度続けたところで異変が起こりました。
レックスの牙が壁に刺さりました。
「ラッキ～！！」
マークはニヤニヤしながら反撃し始めました。
とりあえず耳と目を潰しました。
それからところどころ突き刺し、いたぶりました。
「はははははは！！ザコが！！！」
マークは最後に首を斬りおとしました。

かかった時間、なんと5時間。
帰ってきたときみんなは唖然としてました。
気配だけでは流石の轟竜も冷静ではいられなかったようでした。

素材はいらなかったので売りました。
レアなので行商人が高く買い取ってくれたので次の日
「いやあ、金がありすぎて困っちゃうよ。」

と自慢していました。
マークは金を集めていた理由をすっかり忘れていました。

HUNTING　8　轟竜の裁き（後書き）

轟竜を倒すマークが不自然です。
でも、この装備で倒せたんです。
ちなみに現在マークの装備は
武・アサシンカリンガ
頭・チェーン
胴・チェーン
腕・チェーン
腰・クック
脚・ハンター
これで村長のなら倒せますよ。

HUNTING　9　砂漠の惨劇（前書き）

あり得ないことがありますが気にせずに。

HUNTING　9　砂漠の惨劇

マークは今、砂漠にいます。
先日倒した轟竜が現れたそうです。

マークはキャンプの井戸に飛び込みました。
「うぎゃぁぁぁ！」
変な着地で足を痛めました。

井戸の底、地底湖を抜けると轟竜がいました。
「いたっ！」
マークに気づいた轟竜はいきなり突進してきました。
その瞬間ガレオスが足にかみつき動けなくなりました。
「何この連携プレー！種族違うだろ、オイ！」
そう言ってマークは力尽きました。

気づくとキャンプにいました。
何故か腹の上にネコがいます。
「三回死んだから終わりニャ。」
「は？オレ様はまだ一回しか死んでねぇよ。」
そう言うとネコは後ろを指しました。
ガキと少女が倒れています。
「わかったかニャ？帰るニャ。」
ネコの群れによってマークは村に連行されました。

村につくと村長の胸ぐらを掴んでいいました。
「おい、クエストにオレ様の他に二人いたんだ。説明しろよ。」
「しらねーよ、バーカ！」
村長は逆ギレしてマークの顔面を杖で３００回程突いて逃げていきました。

マークは家に帰るとベッドに倒れ込みました。
「うぜー、あのクソネコ。」
そう呟いた瞬間部屋の扉が開きました。

そこにはさっきのやつらがいました。
「てめえらさっきはよくも・・・！」
マークは怒鳴りました。
「は？俺らはレックスなんて屑狩りに来たんじゃねえよ。」
「私たちは古龍のクシャル・ダオラを狩りに来たんだ。」
マークは青ざめました。
自分よりガキのやつらが伝説の古龍を狩りに来ていたことに。
「てめえとの格の差はこのＳ装備を見れば分かるだろ。まあお前とには見分けられないだろうがな。」
マークはショックで倒れました。
ガキは見下して去っていきました。

HUNTING　9　砂漠の惨劇（後書き）

気づいたらアクセス数１５００近くなっていました。
みなさんありがとうございます！

HUNTING　10　最強への道（前書き）

今回はやたらと変な気がします

HUNTING　10　最強への道

マークはショックから立ち直ると呟きました。
「S装備って何だよ、見たことも聞いたこともないよ。」
マークは非常に腹が立っていたので気晴らしにアサカリに模様を書くことにしました。
「さぁ、オレ様の愛剣アサカリをカッコよくしてやるぜ！」
マークは棚からペンを取り出し、模様を書き始めました。

数分後

「できたぜ！これで切れ味倍増だな！威力もあがる！」
マークは完全にバカでした。

マークは強いハンターについて考えてみました。
「そういえば強いハンターはピアスをつけるらしいな。」
マークは工房へ走って行きました。

二時間後

「ははははは、ピアスつけたから強くなったぞ！」
マークは叫びました。

この際だから髪型も変えることにしました。
今までは《ミナガルデボブ》でしたが《ゲリョスソウル》にしました。
「この華麗なリーゼントの前に全ての敵はひざまずく！」
ちなみに村では《レウスレイヤー》が流行っていました。
マークは流行にのれていませんでした。

「ついでにこの間の金でレイアグリーヴを作るか。」
マークはレイアグリーヴてチェーン装備というミスマッチな格好をしていました。

早速村の人たちに自慢しに行くと誰もいませんでした。
村長のところにいくと人が倒れていました。
「村長、どうした！？」
「村に物資を運んでくる途中に襲われたそうじゃ。」
マークはさらに追及しました。
「護衛のハンターは？」
「鎌蟹に襲われてやられた。しかもやられたのは村でトップクラスのウェンだ。」
マークは鎌蟹とやらを狩ると決意しました。
「マーク、これを受け取りなさい。」
村長はライトニングペインを差し出してきました。

HUNTING　11　空を裂く一対の刃（前書き）

更新遅れました。

HUNTING　11　空を裂く一対の刃

マークはライトニングペインを受け取るとアサカリと一緒に背負いました。
「鎌蟹か・・・村長、依頼を出せ！」
マークは怒りを込めた眼で村長に訴えました。
鎌蟹にやられた人たちの護衛ハンターはマークの幼なじみのウェンでした。
マークは怒りと憎しみを込めた声で叫びました。
村長は黙って依頼を出してくれました。
マークは依頼を受けるとすぐさま戦地へ赴きました。

沼地につきました。
マークは早速支給品をあさり始めました。
携帯食料取り出すと食べました。
「・・・湿気がなんともいえない不味さを引き出しているな。」
そういいつつも全て食べました。

マークは沼地を徘徊しました。
コンガやファンゴがいますが、蟹はいません。
「蟹っていってもヤオザミみたいのだろ、どうせ。」
マークは鎌蟹をなめていました。

暫くすると地面が揺れました。
「じ、地震かっ！？」
マークは揺れに耐えるようにしゃがみました。
その瞬間、マークの体が宙に浮きました。
「なんじゃありゃぁぁぁぁ！！」
マークの前には群青色の巨大蟹が立っていました。

「マジかよ・・・アサカリじゃ勝てねぇよ、絶対。」
マークはそういって気づきました。

「今の武器、ライトニングペインじゃん！」
マークは剣を抜くと蟹の鋏を斬りました。
斬り続けていると何かが空を斬りました。

気づくとキャンプにいました。
首に違和感があったので触ってみると、縫い目がついていました。

HUNTING　12　裂かれる身体（前書き）

コピーというものを知ったので書くのが速くなりました。
更新は今までより若干は早くなると思います。

HUNTING　12　裂かれる身体

「爪は驚異だな・・・爪は。」
呟いた途端マークは閃きました。
「爪を折ればいいんだ！」

マークは蟹のところに行きました。
蟹はコンガを両断していました。
マークは後ろから忍びより、爪を甲殻の隙間に沿って斬っていきます。
蟹は驚いたらしく、少しの間怯みました。
その隙に鋏がボトリと落ちました。
「やったあああああ、鋏を〈シュン〉・・・」
空を斬る音がしてマークの声が響かなくなりました。

気づくとキャンプにいました。

ふと、体を見ると縫われた跡がありました。
「これってもしかしなくてもオレ様の胴体両断された！？」
マークは怖くなりました。
蟹ではなくアイルーの医療技術に。

マークは再び蟹のところに向かいました。
しかし蟹はいません。

「逃げやがったな・・・。」
あたりを見回すとさっき切ったかにの鋏が落ちていました。
「一応持っておくかw」
マークはそれをかついで蟹を探しにいきました。
「こんどこそぶっ倒してやる・・・。」
しばらく歩いていると蟹を発見しました。
「いやがった・・・。」
マークは剣を握り走り出しました。
「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」
剣は蟹の頭に刺さりました
「なにぃぃぃ！　コイツ生きてやがる！」
蟹は爪を振り降ろそうとしました。
しかし、マークの担いでいた爪が勢いで吹き飛び蟹の脳天をかち割りました。
蟹は力を失って沼に倒れ込みました。
「・・・狩った。」
マークは凶悪な爪と甲殻、脚をはぎ取って帰りました。

「・・・狩ったぜ、ジジイ！」
「ほう、鎌蟹を倒すとは・・・ずいぶん強くなったのう。」
村長は報酬を渡し、どこかに立ち去りました。

HUNTING　13　旅立ちの時

「疲れた・・・当分遊んで暮らすか。」
マークは裏山で昼寝を始めました。

マークがいま考えていることは仲間を作ることでした。
「パーティか・・・そうだ！パーティを作ろう！！」
マークはいきなり思い立ちました。
「まずは隊員募集だな・・・パーティ名は・・・。」
マークは考えました。
「そうだ！パーティ名は『チーム・オブ・マーク』！」
マークはこれに決めました。
「・・・でもチームってどうやって作るんだ？」

マークは村長に尋ねてみました。
「街にいってはどうじゃ？　それとウェンも行くようじゃから一緒に行きなさい。」
ということで街に行くことになりました。
「おーい、ウェン！」
ウェンはマークの幼馴染であり、大剣使いである。
「マークか・・・消えろ、キモイ。」
「んだとこのガキ、お前の敵討ちしてやっただろ！」
ウェンはいやな顔をして礼をいいました。
「それでウェン。街に俺様も行くし、チームにもなってやる。ありがたいと思え！」
マークはニヤニヤしていいました。
「ウザい・・・邪魔・・・死ね、マーク。」

ウェンはキレてどこかに行きました。
「んだとクソガキ死ねよ！」
マークは逆ギレしていました。

マークは結局一人で街にいくことになりました。
「なんだあのクソガキは！態度というものをしらないのか！！」
マークは未だにキレています。
一応マークのほうが年上です。
しばらく歩いていると街についたみたいです。
「ここかぁ・・・確かドンドルドルママだったっけ・・・」
マークは街の中へ入っていきました。
「スゲぇ・・・なんだあの防具、武器・・・見たことねぇよ・・・」
マークは感動に満ちていました。

HUNTING　14　ハンターズギルド

マークは街に見とれているとひとりのハンターがぶつかってきました。
「ご、ごめんなさい・・・ってマークくん！？」
ぶつかってきたハンターは以前レイアを狩ってくれたキリンＳ装備のハンターでした。
「ん、あんたは確かレイアの時の・・・」
マークは胸元に目線がいっています。
「今急いでるからまたね！」
マークは立ち去っていく彼女をみていました。

ふと見ると横にギルド本部がありました。
「とりあえず受付をさがすか・・・」
あたりを見回すと受付っぽい所を見つけました。
「アレかな・・・」
マークは歩き出しました。
受付につくと、マークは言いました。
「ここのギルドに登録してほしいんだけど・・・」
受付の人は「ではここに著名してください。」といって分厚い本を取り出しました。
「名前、性別、得意な武器、その他・・・」
マークは上から書いていきました。

マークは登録しました。

早速チームを組もうとまわりの人を見渡しました。
「あいつ顔ゴツイ、あいつキモイ、あいつ弱そう、あいつ生意気そう、あいつ・・・かわいいなw」
といってボーン装備の少女にタックルしました。
「君、オレ様とチームを組まないか？」
危ない声でいいました。
すると少女は
「え・・・？」とびっくりしたような声を上げました。
「このオレ様と狩りをしないかと言ってるんだ」
少女は目を輝かせていました。
周りからは「あんな奴と組むのかよー」とか言ってました。
マークはキッと奴らを睨んでから少女を見ました。
「丁度仲間がいなくて困ってました、ありがとうございます」
あっさり仲間になってくれました。
「俺様の名はマークだ、よろしく」
マークはギルドカードを渡しながらいいました。

ちなみに、マークの装備は
武・ライトニングペイン
頭・レッドピアス
胴・ギザミ
腕・ギザミ
腰・クック
脚・レイア

HUNTING　15　酒場の惨劇

「もう一人くらい欲しいな・・・」
マークはそんなことを考えながら仲間を探しました。
少女の武器は片手剣の『ポイズンタバール』でした。
（オレ様とちょっとかぶるな・・・）
「ガンナーを探すか！」とさけびました。
すると周りにいたガンナーはどこかへいってしまいました。
「なんだよ！あいつらは！！」
マークは続けて叫びました。
「ごめんねぇ！強くてさぁ！！」
すると周りからグラビドシリーズやらバサルシリーズやらのゴツゴツしたハンターがやってきました。
「なんだよ、よよよ・・・オマエら・・・ら・・・」
マークは完璧にビビっていました。
ゴツいハンターはいいました。
「あんたさぁ、調子こきすぎなんだよぉ、死んでくれる？」
「きききき貴様らあああ！」
マークはビビりまくっていました。
マークは後ろから殺気を感じました。
裏拳を入れるとバサルの鼻にヒットしました。
「ぐばあ！」
マークは怯んだバサルに容赦なく蹴りを入れていきます。
バサルが気絶するまで続けました。
ふと後ろを向くとグラビドがものすごい顔をして立っていました。
マークはビビりました。
「おおお前・・・あああ頭無事？」
その一言がグラビドのリミッターを解除しました。
グラビド装備の男はものスゴいグロい顔をしてこう言いました。

「ちょっと来てもらおうか」
腕を捕まれたマークはどうすることもできないいまま連行されて逝きました。

連れていかれた場所は狭い路地でした。
「どうしてくれんの？」グラビ男はまたもやグロい顔で言いました。
「どどどどうってお前らが悪いんだろうが・・・がが」
グラビ男は言いました。
「慰謝料。３００００００Ｚ払え・・・。」
「なんでだよ！お前らが悪いんだろうが！」
マークは相手を忘れていいました。
グラビ男は腰のあたりにある武器、『グラビィトンハンマー』に手をかけました。
「ぶぶぶ・・・武器を人に向けるのはダメなんだ・・・ぞ」
「じゃあ払えよ」といって男はハンマーを持ち上げました。
「・・・・・・うるせぇぇぇぇぇぇ！！！」
マークは我を忘れてアサカリを手にしました。
マークが気づくと男はそこに血を流して倒れていました。

HUNTING　16　屍を越えて

マークはアサカリを落としました。
「ギルドナイツに・・・殺られる」
マークはアサカリを手にして立ち上がりました。
「いや、これは正当防衛だ。間違いない。それと酒場にライトニングを忘れてきた」
ひとりでかつ棒読みで叫び続けていました。

酒場に戻ると少女がいました。
「忘れ物です。それと私の名前はティナです。カードもどうぞ」
ライトニングとギルドカードをわたされました。

マークはクエストを受けることにしました。
「これはどうですか？」
ティナが渡したクエストは盾蟹の狩猟でした。
「盾蟹か、ザコだな」
倒したことがない癖にほざいています。
「マークさんは鎌蟹を倒したんですからね」
「ああ、余裕だったぜ」
とことん自慢するマークでした。

砂漠についたマーク達は支給品を受け取っていました。
マークは携帯食料を貪ります。

そして、「こんかいは双剣だぜぇ！！」といって両手に持ったアサカリとライトニングを振りかざしました。
「蟹なんて一瞬で切り刻んでやる！」といいながら剣を振り回します。
「うぎゃぁぁ！」
マークは腹を切りました。
「痛ってぇぇ！この馬鹿剣が！！」といって地面に剣を投げつけると、
「うっぎゃぁぁぁ！」
剣は足に突き刺さりました。
そんなマークをティナはだるそうな目で見ていました。

マークはキャンプで重傷を負っていたのでティナだけで行くことにしました。
砂漠を歩くこと３０分、ようやく蟹を見つけました。
ティナは蟹の足を片手斧で斬っていきました。
途中までは順調でした。
蟹は急に飛び上がると落ちてきました。
ティナは潰され、動けなくなってしまいました。
「・・・助けて」
ティナは蟹を弱らせるまでしたのにと思いつつ死を覚悟しました。
すると誰かが来て声を上げました。
「ふはははは、蟹よ我が断罪の剣を受けるがいい！！」

ナルシスト調で蟹に剣を刺しているのは天下の馬鹿者マークでした。

HUNTING　16　屍を越えて（後書き）

更新、スピードアップしてきています！
これからもよろしくお願いします！

HUNTING　17　ギルド・ナイツ（前書き）

これから数話、ギャグ無いです

HUNTING　17　ギルド・ナイツ

蟹が倒れてからマークは思いました。
（あの男は死んだのか・・・？だとしたら・・・！）
「ギルドナイツに殺されるー！！」
マークは叫びました。
「死にたくないよぉぉぉ！！」

そんなことを思いながらマーク達は街に戻りました。
なにやら人がにぎわっています。
「あぁ・・・きっとさっき殺したやつが・・・」
（ここは自首するべきか・・・？ギルドナイツに殺されるのは怖すぎる・・・。ここは諦めて・・・）
と考えていると数人の人間がマークの方に近づいてきました。
「貴方がマークさんですね、来て下さい」
マークは連行されていきました。

ついたところは酒場らしき所でした。
「初めましてマーク君。ギルドマスターです」
「・・・はい」
ギルドマスターは強い眼差しでマークをみました。
「どうやら奴を殺したようだね、ありがとう」
マークは意味が分かりませんでした。
「奴は指名手配されていたのだよ。奴を無傷で倒すとは・・・ギルドナイツに入らないか？」
マスターは勧誘しました。
マークは少し考えていいました。
「マスター、オレ様はこうさせていただく」
マークは顔を上げていいました。

「オレ様はハンターを続ける。そしてそいつが指名手配犯だったならそれ相応の報酬を希望するぜ！」
マスター少し考えて、「いいじゃろう」といいました。
しばらくするとギルドナイツが一人向かってきました。
テーブルの上に金が入っている袋を置いて去っていきました。
「かなりでかいな・・・！なんゼニーくれんの？」
「１５万じゃ。」マスターは一言いいました。
「じゅ・・・１５万！？」
マークは喜びに満ち溢れていました。
「これがあればしばらくは遊んで暮らせるぜ！」
マークはチームの仲間のことを忘れて叫びました。

HUNTING　18　一対の余丁（前書き）

サブタイトルが次の話につけようと思っていたものと間違えました。

HUNTING　18　一対の余丁

マークは大金を部屋に持ち帰りました。
「15万なんてたくさん古龍狩らないと手にはいらねぇぜ！」
マークは部屋の中央で舞っていました。
少し経つとノックが聞こえました。
扉を開けるとティナがいました。
「マークさん、明日は雌火竜を狩りに行きましょう」
マークは考えました。
明日は

狩るか、遊ぶか

少し考えてマークは言いました。
「あぁ？レイア？めんどくせーから行かねーよ。
金はたくさんあるんだからな！」
ティナは無言で去っていきました。
「さーて・・・新しい装備を買いに行くか！」
マークはドアを勢いよくあけて外に飛び出しました。

工房に行くとギルドナイツがいました。
マークに気づくと近づいてきました。
「あなたは・・・マークさんですね。これを」
マークは漆黒の防具を手渡されました。
「これは？」
「最新式ギルド装備です」
装着してみるといかにもギルドナイツでした。
「これはマスターからのプレゼントです。その代わりハンター兼ギルドナイツも」
「・・・そんなにナイツにいれたいのか」
マークは困りました。

「一応貰っとく。ありがとうな、気が向いたらナイツになるよ」

マークは三日程遊んでいました。
久々に酒場に行くとがら空きでした。
「どうしたんだ？」
マークは受付嬢に聞きました。
「何やら女の子がやられて大騒ぎしてるらしいですよ」
マークは行ってみることにしました。

言われた場所に行くと女の子が倒れていました。
マークは見覚えがありました。
「・・・ティナ？」
近づいていくと確かにティナでした。
「マークさん・・・レイアを狩りにいったらツガイでてきました・・・」
ティナは苦しそうに言いました
「・・・俺が敵を討つ。だからもういうな。病院に行くぞ」
マークはティナを抱えて病院に向かいました。

「治療費１２万ｚです」
「はぁ！？」
マークは大金に反論しました。
「初級ハンターのあいつに払える額じゃねぇよ！」
マークは吼えます。
「値切っても１０万はかかります・・・」
マークはティナの財布をみました。
「１万８千ｚしかない」
全然足りないのでマークは暫く黙っていました。
数分後、マークは言いました。
「１０万は・・・俺が払う！」

HUNTING　19　一対の巨影と引き抜かれる剣（前書き）

長いことギャグが途絶えていますがそろそろ復活します。

ＨＵＮＴＩＮＧ　１９　一対の巨影と引き抜かれる剣

マークは気づきました。
昨日飲み食いしまくって今が金があわせても９万しかないことに。
「一万足りネェ！」
「稼ぐしかねぇ！！」と言ってマークは部屋を飛び出しました。
ギルドの受付に着くと、
「一万稼げるクエスト！今すぐに！」といいました。
すると
「一対の巨影」報酬１２０００ｚ
マークはその紙を奪い取るようにして持って行きました。
「いくぜぇ！」マークはそのままギルドを飛び出していきました。

マークは森を駆け抜けています。
「レウスでてきやがれ！」
マークは叫んでいたらレイアが降りてきました。
「そこか！」
マークは見つけるとライトニングを投げつけました。
剣はレイアの翼膜を突き抜けて飛んでいきました。
地面に刺さった剣を抜くとマークはレイアに回転切りをしました。
以外にもそれで死にました。
「よわっ」
しかし、よくみるとレイアにはたくさん傷が付いていました。
「・・・ティナが弱らせたのかな」
レイアを解体しながら思いました。
解体し終わると紅い影が降り立ちました。

「来たな！雑魚レウス！」
マークは剣をレウスに投げました。
剣はレウスの足に刺さりましたが、レウスはそのままおりてきました。
「えー！マジで！？落ちてこいよ！！」
マークは怒鳴りました。
レウスは地面に降り立ち、マークに気づきました。
足に刺さった剣はレウスの足に潰されて折れていました。

マークは折れた剣を見てアサカリを抜きました。
「おのれ、ティナとライトニングの敵！」
マークはがむしゃらに切りつけました。
しかし弾かれてばかりでした。
「か、堅いっ！？」
そう、この王者は長い年月を経て沢山の生き物の頂点に立ち続けてきた火竜
Gクラスのリオレウスでした。
マークはそうと知らずに頭殻を突きます。
アサカリは折れました。
「ア、アサカリッ！？」
マークは愛剣を失って放心状態でした。

朦朧とした意識の中、懐かしい声が。
［マーク、鎧の背に着いた棒を抜くのじゃ！］
「村長！？」

マークは意識を取り戻しました。
王者は天空から見おろしています。

マークは背に着いていた棒を抜きました。
「ふはははは、火竜よ。我が断罪の剣・ギルドナイツカリンガを受けて散るがいい！！」
マークの腕には漆黒のアサカリが握られていました。

HUNTING　20　魔剣ギルドナイツカリンガ

火竜はマークに飛んできました。
「うわぁぁ！！」マークは咄嗟に盾を構えました。
ガチンという音がしてマークは後ろに仰け反りました。
火竜は地面におりるとマークに突進してきました。
「うわぁぁぁ！死ぬ！死ぬ！！」マークは剣をもったままうつ伏せになりました。
火竜の巨体がマークの体の上を通り過ぎていきました。
マークは火竜に反撃しようと立ち上がりました。
「え！？」
マークは驚きました。
そこには火竜が血を流して倒れていました。
剣を見ると火竜の血が滴っていました。

Guild　Knights　Kalinga

これはギルドが開発したカリンガ型の魔剣。
マークはその切れ味に絶句しました。
擦れただけで腹を斬り裂いてしまうほどの威力だからです。
「ヤバいよ・・・これ」
もう一度切れ味を確かめるように木を斬りました。
しかし、弾かれてしまいました。
「・・・まさか！？」
説明書を読むと使用者に敵意を持つものを斬るときにしか真価を発

揮しないと書かれていました。

マークはギルドナイツカリンガという名前が長ったらしいと思ったので『ギルカリ』と呼ぶことにしました。
「よし！オレ様の相棒、ギルカリを研ぐぜ！！」
マークは砥石でギルカリを研ごうとすると砥石は真っ二つになってしまいました。
「うぉ！？危ねぇ！手が切れるとこだったぜ・・・てか砥石って敵意あんのかよ！？」
マークは一人ではしゃいでいました。
落ち着いたところで不意にギルドナイツに勧誘されたことを思い出しました。

HUNTING　21　悪天候

マークはギルドに入ることはやめたんだと思いつつも金欠になったら入るつもりでした。
「ギルカリはつえぇぜ～」
金が大量に入ったので酒場に向かいました。
しかし、
「この金はティナの治療費だった！」
マークは急いで病院に行きました。

病院に行くとティナの怪我は完治していました。
「Ｗｈｙ？」
マークは違う言語で尋ねました。
「親が貴族で治療費を払っていきましたよ」
マークは驚きを隠せず、病院内を駆け抜けて吼えました。
その後、医者に迷惑と言われ見事に追い出されました。

数日間は黙っていましたが実は、マークはギルカリを使いたくてしょうがありません。
「よし！飛竜を倒しにいくぜ！！」
マークはティナを連れて密林にいきました。

今回のクエストはゲリョス2頭の討伐。
「ゲリョスなんて名前的に楽勝だぜ！」
マークとティナはゲリョスと戦ったことがありません。
準備を整えると、2人はゲリョスを倒しに密林に足を踏み入れていきました。

キャンプに着いたらお馴染み携帯食料を食べました。
「さあ、いくぞ！」
「はい、マークさん！」
ふたりは元気よく走っていきました。

ゲリョスを見つけました。
「柔らかそうですね」
「キモイなぁ、あれ」
暫く眺めていたら逃げられました。
「あ～ぁ、逃げられちゃったよ・・・」
マークたちはゲリョスの逃げた方向に向かって歩いていました。
すると突然上からゲリョスが落ちてきました。
ティナは避けましたが、マークには直撃しました。
「ぎゃあああ！なんだなんだ！？」
マークは叫びました。
落ちてきたゲリョスは死んでいました。
マークたちは死んだゲリョスを眺めて話しあっていると、いつの間にか天気が悪くなっていました。
極端に天気が悪いので雨宿りすることにしました。
「あの洞窟に入ろう」
マークはティナをつれて洞窟に入りました。

HUNTING　22　風を纏いし龍

「マークさん、あのモンスターなんですか？」
「見たこと無いな。四足歩行で翼がある・・・異形だな」
見たことのないモンスターを追っていくと二頭目のゲリョスがいました。
「あ、威嚇しあった」
謎のモンスターとゲリョスは戦闘体制に入りました。

数分後
ゲリョスは死んでいました。
「つえーなあのモンスター」
「まあ、依頼達成ですし、あれは後で調べましょう」
ゲリョスをはぎ取ってキャンプに戻りました。

「！？　見つかった！」
戻る途中、謎のモンスターに遭遇しました。
「マークさん、もしかしてこれってクシャル・ダオラじゃないですか？」
「なんだそれ？」
「風の鎧を纏った金属の古龍ですよ！」
「風の鎧、金属の甲殻・・・間違いないな」
マークたちは剣を抜きました。

「うおおおおお！！」
マークは突っ込んでいきました。
ギルカリを古龍の甲殻に思い切り切りつけました。

風で押し返され、思い切り空を斬りました。
マークはそのまま風で吹っ飛ばされていきました。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
これが古龍の力か、と思いながらマークは崖の下に落ちていきました。
落ちていくマークをティナは全然気づきませんでした。

マークは崖の下で目を覚ましました。
「・・・ここは？」
そこにはたくさんの骨や甲殻が散らばっていました
マークは使えそうな素材を根こそぎ取っていました。

ティナは鋼龍と戦っていました。
角と爪を折っていました。
角が折れたら風が消えました。
「風が消えたら戦いやすいな・・・」
思ったより素早くなく、風がなければ驚異ではありませんでした。
順調に甲殻を砕いていき、仕舞には尻尾も切りました。

やがて朝になり、鋼龍は逃げ去りました。

マークは謎の素材、ティナは貴重な素材をもって帰りました。

マークがとってきた素材は少しボロい布や骸骨などでした。
ティナはとってきた素材が意外と多くてクシャナシリーズをそろえることができました。
マークは素材を持って加工屋に行きました。
「これなんかに使えないか？」
マークは聞くと、加工屋のおっさんはある装備が作れるといいました。

ＨＵＮＴＩＮＧ　２２　風を纏いし龍（後書き）

ついに２ｎｄＧ情報が更新されました。
来年３月１３日発売だそうです。

懐かしきあのステージや樹海がでてきますし、これまた懐かしきヤマツカミもでてきますし。
ダイミョウのリペとかナルガクルガはあんまり期待してないんですけどね。
ヴォルガノとかヒプノックとかはでるんでしょうかね。
今回はＭＨＰ以上の難しさを期待しますか。

HUNTING　23　決闘

おっさんはデスギアシリーズが作れると言っていました。
「デスギアって強いんですか？」
ティナの質問におっさんは答えました。
「クシャナよりは弱いよ。それと兄ちゃんがつけてる装備よりも弱い」
「そういえばマークさんの装備って何ですか？」
マークは聞かれてニヤリと笑いました。
「よくぞきいてくれた。これはな、新型のギルドナイツ装備だ」
マークは付属の漆黒のマントを靡かせて語りました。

その瞬間後から声を掛けられました。

「君がギルドナイツを副業にしてる者か」
マークがギルカリを掲げていると誰かが話しかけてきました。
「誰だよ、おまえ」
「私の名はカオス。見ての通り君と同じ職さ」
彼は銀と黒紫のギルド装備に身を包んだ男でした。
「へぇ、それで何をしに来たんだい？」
マークは挑発的な口調でいいました。
「一度手をあわせてみたくてね・・・狩らせてもらうよ」
カオスはどこからか大剣を取り出して構えました。
その剣には《Ｇｕｉｌｄ　Ｋｎｉｇｈｔｓ　Ｂｌａｄｅ》と刻まれていました。
「・・・マークよ、貴様の実力、見せてもらうわ！！」

マークは突然の出来事に混乱しています。
「い・・・いいぜ！やってやるさ・・・！」
マークは剣を構えました。
カオスは剣をマークに向かって振り回しました。
マークはなんとかよけ、剣を振り回しました。
「うぉぉぉ！くらえぇぇぇぇ！！」
マークの剣とカオスの剣がぶつかり、火花が散りました。
カオスはマークの足を蹴り、マークはバランスを崩して地面に転びました。
「隙ありぃぃぃ！」カオスはそういいながら大剣をマークに振り下ろしました。
大剣はマークの頭に当たりました。
しかし何故か弾かれました。
「そうか・・・それもギルカリと同じなのか！」
マークは彼に強い敵意をもっていませんでした。
マークは剣を横に振り回しながら突撃しました。
「・・・やるな・・・」
カオスは武器をしまうと去っていきました。

「マークさん凄いですね！」
明らかにマークの方が押されていましたがティナは頭に当たったところを剣で弾いたように見えたらしいのでマークはホッとしました。

ＨＵＮＴＩＮＧ　２４　恐怖のトレーニング（前書き）

初の１０００文字超えです。
「うわっ、今まで超えてなかったのかよ」ってところは見逃してください。

HUNTING　24　恐怖のトレーニング

その後マークの頭は大きく腫れました。
「頭がジンジンする・・・」
その頭を見てティナは笑いをこらえています。
マークの着ていた装備がいかに頑丈とはいえ、衝撃はかなりのものだったのです。
マークは痛みでしばらく寝込んでいました。
マークが完全に眠りについていると、マークの部屋のドアが開いて男が2人入ってきました。
男たちはマークの部屋を何かを探しているかのように荒らし始めました。
「誰だおまえらー！」
マークの声に男は振り返りました。
「マークさんはギルドナイツに入るので引越の準備です」
マークは心の中でマスターに邪念を送りました。

男についていくとギルドナイツ寮というものが見えました。
よくみると脇にディアブロスとグラビモスの剥製がありました。
「なんだココ・・・すごいってかコワイ・・・」
建物の中に入ると人の声が聞こえてきました。
しばらく歩いてあたりを見回すと体育館のような部屋にたくさんギルドナイツがいました。サンドバックやらのトレーニング器具で汗

を流しています。
「マークさんも今日からここで特訓してもらいます。」
「は！？ふざけんなよ！！めんどくさいよ！」
マークは叫びました。すると大勢のギルドナイツがマークの方を睨みつけました。
「マークさんの部屋は2階になります。」
再びマークは男に黙ってついていきました。

「対人戦は気が引けるなー」
マークはベッドの上で呟きました。
何やらギルドナイツには5種類の部隊があるとのことです。
マークが入る暗殺部隊。
誰も引き受けない飛竜を狩る狩猟部隊。
誰も引き受けない古龍を狩る討伐部隊。
規則に反するものを探す監視部隊。
そしてギルドマスターなど重要人物を護衛する護衛部隊。
「狩猟部隊がよかったなー」
しかしマークの本業はハンターだからやってるも同然です。
マークはギルドとハンターの仕事を一日おきにすることにしました。

マークはギルカリを眺めていました。
「カッコいいなぁ・・・オレ様みたいに」
マークが呟くと部屋のドアが開いて一人の男が入ってきました。
「マーク、トレーニングだ。サボるなよ・・・。」

そういうと男は出て行きました。
「トレーニング!?めんどくせぇなぁ・・・」
マークはギルカリをしまうと階段を下っていきました。

「トレーニングって筋トレかよ」
マークはやる気が失せました。
マークが脱走をはかろうとしたときでした。
「ちょっと君!」
呼び止められて振り返りました。
「何だ?」
「暗殺部隊だよね」
マークは頷きました。
「やっぱり新入りのマーク君だ」
ひとりで盛り上がっている誰かを眺めていました。

あの後聞かされたが暗殺部隊の今日の訓練は実戦らしい。
「マーク君」
マークは嫌な顔で振り向きました。
「自己紹介がまだだったね。あたしは暗殺部隊騎士長のリースです」
「はいはいそうですか・・・ってえっ、騎士長!?」
マークにはこの生意気そうな小娘が騎士長なのが気に入りませんでした。

HUNTING　２４　恐怖のトレーニング（後書き）

ギルドナイツは完全にぼくの想像です。

HUNTING　25　戦闘訓練（前書き）

ちょっと謎ですが気にしないでください

HUNTING　25　戦闘訓練

「うわあ！？」
マークは副騎士団長にやられています。
「弱いな・・・残月刀！」
「なんだよその技！」
マークは本気でかかってきやがれといったばかりに一方的にやられていました。
「しかたない俺の秘剣も見せてやる」
マークは剣を両手で持ち構えました。
「遅い・・・燕返し！」
顎をやられて道場の壁に叩きつけられました。
マークは頑張って立ち上がりました。
「元は武士だか知らんが・・・狩人の強さはこんなもんじゃない！」
マークは再び構えました。
「マークよ、おまえは頑張った・・・新月斬！」
「訓練だからってこんな腕の言い奴とは戦えないからな・・・秘剣、マークバスター！」
二つの剣は交差して弾かれました。
周りのギルドナイツも目を奪われるほどの光景でした。
「マークよ、技はいいがネーミングセンスがないぞ」
副団長は刀を鞘に納めて去っていきました。

「マーク君もやるね～新月斬を弾くなんて。でも副団長に勝てそうにないね」
マークはショックを受けました。

マークは名誉挽回に他の人を探しました。
すると背が小さい少年に目をとまりました。
「おい。お前、オレ様と勝負しろ！」
少年は、「いいですけど・・・」と自信なさそうに言いました。
マークは剣を構えました。
少年はライトボウガンです。
「うぉぉぉ！」マークは走り出しました。
少年はライトボウガンを構えてマークを狙っています。マークが剣を振り上げたとき、少年は引きがねをひきました。
マークの剣が床に落ち、少年はマークの腹をライトボウガンで殴りました。
「ぐふぅぅう！キサマ・・・！」
マークは倒れました。
少年はライトボウガンを構えたまま突っ立っていました。
そこへ騎士団長がきて、
「マッシー君、マーク君を倒すなんてなかなかやるじゃない！」
マークは屈辱に満ち溢れていました。

HUNTING　26　潜入！　飛竜の巣！？（前書き）

あり得ないですがそこは目を瞑ってください。

HUNTING　26　潜入！　飛竜の巣！？

「くそぉ！」
マークは部屋の壁を殴りつけました。
マークの拳からは血が滴っています。
「バカいてぇよ、誰だよやった奴！」
あなたです。
マークは独り叫びながら寝ました。

「・・・ークさん、マークさん！」
マークは目を覚ましました。
見上げるとティナが心配そうにみています。
「どうしたんですかこの手！」
ふと右手を見ると血が滴っています。
「気にするな・・・気分転換に狩りにいくか！」
マークは鎧を纏って武器を剣をさして立ち上がりました。

選んだクエストは「潜入！飛竜の巣」でした。
森丘に着いたマークたちは支給品を回収し、身支度を済ませました。
「よし、行くか！」マークたちはベースキャンプから出ました。勿論、携帯食料を食べてから。

アプトノスが5，6頭の群れで草を食べています。
エリア2につくと異常に大量のランポスがいました。
「！？　なんでこんなにいるんだ！？」
見た感じでは20頭はいます。
マークたちはいったんエリア1に退くことにしました。

「マ、マジかよ」
マークは青ざめました。
ランポスの群が食べていたもの、それは雌火竜でした。
「マークさん、あの鱗って逆鱗じゃないですか？」
ティナが目を輝かせていいました。
「確かに他に比べれば違って見えるな」
マークは確かめに行きました。
マークが行くとランポスが大量に襲いかかってきました。
「うぜーよお前ら」
マークは切り捨てます。
ティナも続いて切りつけました。

「終わりましたね」
ティナは安心して逆鱗をはぎ取りに行きました。
「てかオレ様は卵運びに来たんじゃなかったっけ？」
マークが空を見ながら呟きました。

マークたちは卵を抱えて歩いています。
「重いなぁ・・・でももうすぐだ。」

あと少しでエリア1に着くところです。
エリア1にはアプトノスが5頭います。
「よーし、ラストスパートだ！」

卵を抱えながらキャンプに着きました。
「終わりましたね」
ティナが微笑みながらいいました。

ミシッ

「・・・！？」
変な音がしました
音のした方へ行くと納品ボックスがありました。
「まさかな・・・」
マークが覗くと三つあったはずの卵が二つになっていました。
「マークさんどうしました・・・あっ、かわいい♪」
消えた卵の代わりに火竜の雛がいました。

HUNTING　27　密猟者

火竜の雛は他の卵を破壊しはじめました。
「コイツ・・・よくもタマゴをぉぉお！」
マークは剣を抜き、雛めがけて振り下ろそうとしました。
するとティナが
「マークさん、この雛は私たちが持って帰りましょう」
マークは「持ってかえってどうするんだよ！」といいました。
そんなことを言い争っているとクエストが終了して街に帰ることになりました。

マークとティナと雛は街でターゲットにされました。
「だから持ってくるなっていっただろ！」
マークは銃撃を避けながら走っています。
「でも、かわいいじゃないですかぁ♪」
「そのかわいいで命の危険が迫ってるんだ！！」
久々にまともな発言をしたマークでした。

街の外にでました。
「マークさん、私この雛飼います！」
「バーカ、どうやって飼うんだよ！」
二人は喧嘩になりました。
ティナがあっさり負けました。
「女が男に勝てると思うな！」
「マークさんなんかにも負けた・・・もういいです・・・私ひとり

で飼いますから」
そういってティナは立ち去りました。

しばらくマークは突っ立っていました。
「ほっとけばいいさ」
マークはギルドにいって新しい仲間を探そうと考えました。
しかし皆マークには目もくれません。
「おーい、誰か仲間になってやってもいいぜー」
マークはそういいながら歩いています。
すると後ろから声をかけられました。
マークが後ろを振り向くと、そこにはカオスがいました。
「マーク、緊急事態だ！」
「どうした？」
話を聞くとなにやら密猟者がいるらしいからそれを討てだということです。
「しかたねぇな、カオス、いくぜ！」
カオスをつれて密猟者を狩りにいきました。

「密猟者はこの近辺のモンスターをターゲットにしてるらしい」
「そうか・・・カオス、あいつらか？」
そこには十数人の密猟者がいました。
「俺は囮で前衛を薙払う。お前は後ろの奴らを暗殺しておいてくれ」
カオスはそういって走っていきました。
密猟者たちはダガーを突きつけますがカオスに薙払われました。
一方マークは後ろの方から大将を狙って隠れています。
大将がカオスを弓で狙いを定めている最中にマークは腰についているダーク（短剣）を投げました。
見事に大将の息の根を止めました。
「よしっ！」
マークとカオスはその後も大量の密猟者を切りました。

「任務完了、直ちに帰還する」
「カオス、帰ろうぜ！」
二人は密猟者の亡骸を踏みつけ立ち去りました。

HUNTING　27　密猟者（後書き）

本格的なギルドナイツになりました。
実際のナイツはどんなのだか知りませんがこの世界ではこれでいきます。

HUNTING　28　禁断の雛は銀竜

密猟者事件から約2ヶ月が経過しました。
マークはあの後狩りも暗殺もカオスと組んでいます。
「カオス～、何か暴力団が暴れてるらしいから殺せだと」
「団長も人使いが荒いな・・・まぁあいつのおかげでエリート騎士になれたが」
カオスは溜息をついて剣を担ぎました。

街の門にて

「この時間に出てくるんだよな」
「確かな」
暫く監視していました。

1時間経過

「こねぇじゃねぇか」
「俺にいうな！」

更に1時間経過

「来たぞ、マーク。起きろ」
「ん・・・ああ」
ひとりの少女が襲われていました。
「パターン1でいくぞ」

パターン1とは密猟者戦でやった作戦です。
カオスが出ていこうとしたときでした。
「ぐぎゃぁぁぁぁ！！」
「なんなだありゃ！？」
空から銀竜が現れて暴力団を潰しました。
マークはその光景を見て変な声をあげていました。
「ありがとう、ソル・・・あれ、マークさん？」
銀竜を撫でている少女はティナでした。

「ティナ！？なんでここに！？」
マークは驚きました。
「おまえ・・・この銀竜はあのときの雛か・・・？」
「そうですけど」ティナは軽く答えました。
マークは後悔しました。
あのときティナと別れていなければオレ様にもこの竜を操れていたのではないか・・・と。

久々にティナと狩りに出かけました。
もうティナの強さはケタ外れになっていました。
ティナの防具は頭から足まで全てゴールドルナでした。
ちなみに武器はゴールドマロウ。
どのような経緯でこうなったか聞くと、半月前銀竜に妻ができてその妻が卵産んだ後に死んだからその素材を使ったらしいです。
卵は既にかえった後でみんな巣立った後でした。

マークは銀竜との連携狩猟に驚くばかりでした。

HUNTING　29　奇面族の戦

（オレ様は銀竜より黒龍のほうがいいなぁ・・・見たことないけど）
マークは黒龍と仲間になって敵を蹴散らしている自分を想像していました。
（黒龍ってどんなヤツかな・・・村長に聞いたことしかないけどめちゃくちゃ強いっぽいぜ！）
「ま、オレ様の手にかかればただの虫ケラだけどな！」
マークはそういいながら高笑いしていました。
「マークさん？」
マークはティナに声をかけられて妄想の世界から帰ってきました。
「はやくチャチャブーたちを探しましょう。」
「チャチャブーってどんな奴だ？」
「知らないんですか？」
「まぁ、コイツバカだからな」
ティナとどこからか出現したカオスはだるそうな顔でマークを見ました。
「奇面族って言われる奴だ」
「ああ、この話の奴かな、〈奇面族はもとより奇面王すらかなうものがないといわれた奇剣チャチャブー〉って奴のチャチャブー？」
マークは熱心に語りました。
「マークさん、それ〈天下はもとより天上すらかなうものがないといわれた名刀〉の間違いじゃ？」
ティナは呆れた顔をして歩いていきました。
「まぁそのへんにいるだろ」
マークはそう言って再び探し始めました。

しばらく歩いてエリア3の端のあたりまできて、
「あれだ」
カオスが赤いキノコのようなものを指で示しました。
「あれかよ！ただのキノコじゃねーか！！」
マークはそう言って近づいていきました。
すると突然キノコの下から何かが出てきて奇声を上げました。
「うわ！なんだコイツ！！　痛てっ！」
チャチャブーはマークを総攻撃しています。
「うぎゃっやめろ死ぬ！」
マークの顔をズタボロに斬り裂くチャチャブー。
マークは久々に運ばれていきました。
「「何やってんだあいつ」」
カオスとティナはチャチャブーを片づけてから暫く眺めていました。

マークはエリア4でキノコを発見。
チャチャブーが隠れているキノコなので「チャノコ」とマークは一人で呼んでいました。
「出たな！悪霊が！オレ様が徐霊してやるぜ！」
マークはチャチャブーに近づいていきました。
そしてチャチャブーが出てくる前にキノコに剣を突き刺しました。
「ハーッハッハッハ！雑魚が調子にのるからこうなるんだよ！」

マークは一人で叫んでいました。

マークは数分たったのに何も起きない事を不振に思いました。
すると後ろからティナたちがやってきました。
「マークさん、何やってるんですか？」
「チャチャブー出てこねぇんだよ」
マークは剣を抜きました。
「俺たちがおまえが運ばれてる間に全滅させたから」
マークは出番がありませんでした。
「まだいるかもしれない！」
マークはそういって飛竜の巣に飛び込んでいきました。
「うおおおおお、なんだこれは！？」
ティナとカオスは暫くマークの絶叫を聞いていました。

カオスたちがマークの近くにいくと大量のチャチャブーがリオレウスと戦っていました。
何匹かのチャチャブーが倒れています。
レウスは体の所々から血が出ていました。
「おぉぉ！スゲぇ！」
マークはその戦闘に見とれていました。
レウスは弱っていました。
チャチャブーは全滅済みです。
マークがチャンスと剣を抜きました。
するとどこからか大きなチャチャブーが現れてレウスをなぐりつけました
数分後、立っていたのは大きなチャチャブーでした。

HUNTING　29　奇面族の戦（後書き）

途中で出てきた〈奇面族はもとより奇面王すらかなわないと言われた奇剣チャチャブー〉はわたしのギルドカードの内容です。

ＨＵＮＴＩＮＧ　３０　長の資格（前書き）

気づいたら本編３０話突破してました。
それとアクセス数５０００突破していました。ありがとうございます。大作にはほど遠いですが。

HUNTING　30　長の資格

「なんだあれ・・・」
マークたちが見た物は肉焼きセットがの頭にのっている。
チャチャブーでした。
そのチャチャブーがチャチャブーお馴染みの奇声を発すると大量にいたチャチャブー達は肉焼きチャチャブーと一緒にエリア６のほうに消えていきました。
「頭に肉焼きセットが・・・スゲぇ・・・！」
マークは一人で盛りあがっていました。

翌日カオスがマークの部屋に行くとマークは頭に肉焼きセットを乗せて全裸で棒を振り回したり、奇声をあげたりして見る方が恥ずかしかったのでカオスは扉を閉めました。
「カオスさんどうしたんですか？」
「いや、何でもない・・・無くはないが・・・とりあえずマークの部屋には行くな」
カオスが絶望的な表情で言ったのでティナはマークがどんなバカをしたのか知りたくなりました。

カオスが去った後、マークの部屋に行くとマークは肉焼きセットを頭にのせて全裸で大の字で寝ていました。

ティナは黙って扉を閉めました。
「マークさんのバカッ！！。チャチャブーの巣に行っちゃえええええ！！！！！」
ティナは顔を真っ赤にして去っていきました。

「・・・・・どこだここは・・・あぁ、オレ様の家か・・・・」
マークは起き上がり自分の姿に驚きました。
「うわ！なんだこりゃ！服が・・・ない！」
マークは慌ててシャツとパンツを着ました。
「なんでだ・・・？記憶が全然ない・・・・。」
「確かチャチャブーの討伐にいって帰ってきて・・・・」
マークはとりあえず外に出てみました。
マークは村人が自分を見て笑っている気がしました。
「ん・・・？頭が重い・・・・」
マークが頭に手をやると肉焼きセットがのっていました。
「！？肉焼きセット！？　　とれねぇぇぇ！」
マークは肉焼きセットを思い切り引っ張りましたがびくともしませんでした。

マークは黙って座りました。
「チャチャブーの呪いだ・・・」

青白い顔は肉焼きセットで笑った奴に畏怖の念を与えました。
「破ッ！」
パコーンという音がして肉焼きセットが割れました。
マークの頭に当たってマークの頭にたんこぶを作りました。
「何やってんだよ」
後ろを見るとギルドナイツブレイドを構えたカオスがいました。
「いてぇよ、バカ」
「ギルドナイツブレイド以外の武器で割ればよかったか？」
マークは頭を両断されなかったことに感謝しました。

マークはしばらく座っていました。
「あのまま肉焼きセットがとれなかったらオレ様は大量のチャチャブーを従えていたかもしれない・・・。」
マークはそう言い出しました。
「よし！オレ様は肉焼きチャチャブーになるぞ！・・・でもどうやってなるんだろ・・・
そうだ！あの被り物だ！！」
マークはドアを勢いよく開けて外に飛び出しました。
「肉焼きセット全部くれ！」
マークは大金をはたいて１１個のセットを買いました。
マークはいそいで一人で狩りに出かけました。

HUNTING　31　空は蒼、崖の上には奇面王

「出てこいチャチャブー！！」
マークは全速力で走っています。
「肉焼きチャチャブー！！」
マークが周りの雑魚を葬っていると誰かが現れました。
それは人にしては余りに小さかったのでマカオは目を疑いました。
「お前は山菜ジジィ！」
マークは山菜ジジィに敗北した過去があったので怒りがこみ上げてきました。
「久しぶりじゃのう」

マークはジジィから沢山の情報を手に入れました。
モンスターの弱点、武器の特性、武器の奥義、そして禁じられた竜操術。
竜操術のやり方こそ教えてもらえなかったものの、発祥の地などを教えてもらいました。
「ジジィ、例を言うぜ。またな」
マークは聞けるだけ聞いて立ち去りました。

マークは再び肉チャチャを探し始めました。
「くそぉ～・・・全然いねぇよ・・・」
マークはエリア５に行きました。
「ここにいたんだけどなぁ・・・」
マークはエリア６に行ってみることにしました。

マークがエリア６に着くとそこには蒼い色をしたリオレウスがいました。
黙って空を見上げています。
「何あれレアじゃん！」
マークは肉チャチャを忘れて崖を降りていきました。

蒼火竜をよくみるととても小さく、マークよりちょっと大きい程度でした。
成竜になりたてなのでしょう。
マークは今まで何頭もの竜を狩ってきました（殆どマーク以外の人が狩った）が、その火竜を狩る気にはなれませんでした。
「なんか弱ってるみたいだな」
よく見ると刃物で付けたような傷がたくさんありました。
蒼いレウスはマークを見つけて威嚇するも弱々しかったのでマークは剣を納めて回復薬をかけ始めました。
「こいつは俺の奴隷になるかもしれないぜ、ウヒャヒャヒャヒャ！」

マークが手当していると崖の上から奇妙な声が聞こえました。
「誰だよウゼえな」
マークが上を向くとそこには肉焼きセットを頭につけた小さいモノが見えました。
「あれは・・・まさか！！」
崖の上にはキングチャチャブーがいました。
「あいつを・・・あいつを倒せば・・・大量のチャチャブーどもはオレ様の手下に・・・！」
マークはそう言って崖を上っていきました。
「うぉぉぉぉ！今行くぜ！」
マークが崖を上り終えたとき、キングチャチャブーは剣を振り上げていました。

HUNTING　31　空は蒼、崖の上には奇面王（後書き）

現在番外編制作中です。
近日公開です。やはりみじかいですが。

EXTRA　HUNTING　2　ある女性と祖龍（前書き）

注意
本編とは関係ありません。
マークは出てきません。

EXTRA　HUNTING　2　ある女性と祖龍

「カオス待ってて」
刀を背に、彼女はミナガルデを出ました。

「祖龍・・・あいつを倒せばあたしの刀は最高峰の強さを得る」
祖龍はいわずとしれた伝説の龍。
あれを斬ることができるのは龍剣。
しかし、彼女の刀は龍の力を持っていませんでした。

「ねぇ天上天下、どうしたら強くなれるの？」

彼女は愛刀の天上天下無双刀に語りかけます。
しかし相手は刀。返事はありません。

一月後、ドンドルマにつきました。

「ついた・・・ね。」

彼女は決意を固めた瞳を門に向け、そのまま中に入っていきました。

街は大騒ぎしていました。
「祖龍が来たぞっ！！」
ハンターが叫んでいるのを聞きつけ、彼女は酒場に駆けつけました。
すでに酒場にはたった二人のハンターしかいませんでした。
「貴女、祖龍を斬りに行くのかしら？」
彼女は刀を握りしめ、強く頷きました。
「わかった。祖龍討伐メンバーに加えておくよ」
女のハンターがニコリと笑って書類に文字を書き込んでいきました。
「あとひとり・・・まともな奴なら嬉しいけどな」
一対の剣を背負った男が呟きました。
「あの、みなさん名前は？」
彼女が尋ねると、男は
「俺はウェンだ。大剣使ってたが蟹に腕切られてから重いものが持てなくなったってところか」
「わたしはライザ。大剣使ってるけど今回は双剣。見れば分かるだろうけど封龍剣【超絶一門】使う」
みんな自己紹介が終わり、祖龍を狩りに行くことになりました。

塔・最上階

そこには真っ白な龍がいました。
斬り付ける度に血液が流れますが倒れる気配はありません。
彼女は脚を斬っていましたが、突然甲殻が硬くなりました。
「・・・斬れない！？」
皆、疑問に思いつつも気刃斬り、乱舞でせめていきました。

約半日後

塔の最上階には祖龍の亡骸が横たわっていました。
その亡骸は、首がありませんでした。
「おまえ・・・龍の武器じゃないのに・・・奴の首を・・・」
ウェンは多少怯えながらつぶやきました。
「・・・あたしに斬れないものはないよ」
彼女は微笑み龍から翼膜を剥ぎ取っていました。

街に戻ってもカオスはいませんでした。
彼女は彼を追う為、更なる高みを目指す為、己の太刀を強化しました。

「カオス、待ってて。今すぐ追いつくから。じゃあ行こっか、天上天下改め・・・三千世界無双刀！」

こうして彼女はドンドルマを後にしました、

EXTRA　HUNTING　2　ある女性と祖龍（後書き）

この話の主人公は本編に出てきません。

HUNTING　32　蒼竜との一時

「うぎゃぁぁぁ、脳天かち割られるっ！？」
マークが変な声をあげたとき、爆風で吹き飛ばされました。
キングチャチャブーも吹き飛ばされたようでした。

気づくと崖の下に倒れていました。
横を振り向くと残酷な光景が広がっていました。
八つ裂きにされたキングチャチャブーが落ちていたのをみたマークは酷く吐き気をおぼえました。
「キングチャチャブー！！」
王の証の肉焼きセットまで破壊されていました。
マークは今回の目的の肉焼きセットを入手できなかったので落ち込みました。
「一体誰がやったんだ？」
マークが疑問に思うと後ろで竜の声が聞こえました。
声の主はリオソウルでした。

帰ろうとするとソウルも付いていきました。
しかし、竜操術が使えないので山菜ジジイに聞くことにしました。

マークはエリア7に行きました。
山菜ジジイが巨大キノコに腰掛けていました。
「おいジイさん、竜操術を教えてくれ。」
マークがそういうとジジイは
「駄目じゃ。」そう答えました。
「なんでだよ！いいじゃねぇか！！」
マークは大声を出して怒鳴りました。
「駄目じゃ。」
マークは腹が立ってきました。
「このケチジジイがぁ・・・」

諦めてエリア１０に出るとあのリオソウルがいました。
「・・・おまえと話せたらなぁ」
マークはリオソウルの脚に腰掛けました。
リオソウルはこっちを眺めていました。

数時間後

マークは目を覚ましました。
起きたらそこはエリア５でした。
ソウルも寝ています。
「こいつが運んできたのか」
マークは落ちてたドクロを転がしてソウルが起きるのを待っていました。

暫くすると大勢の人の声が聞こえました。
二つの声は聞き覚えがあります。
「くっ、何でこんな時にあいつがいないんだ！」
「ごめんなさい！　ナイツではないので人は・・・ソルにやらせます！」
空から銀竜が降りてきましたが人の数が多すぎて苦戦しています。「あれは密猟者か・・・そうか、オレ様の出番か」
マークは剣を抜くと密猟集団の方に走っていきました。

HUNTING　33　百人斬り（前書き）

やたらと短いです。

HUNTING　33　百人斬り

「何あの数」
マークはそう呟きました。
凄いことに１００人くらいの人ｖｓカオス&銀竜が繰り広げられていました。
「ん、マカオ！　手伝え！」
カオスに呼びかけられました。

二時間後

カオスとマークは疲れ果てていました。
銀竜は軽傷のようですがマークたちはヤバいです。
一人ですがマークたちは動けません。
残ったのは大将らしく銀竜と互角以上に渡り合っています。
銀竜は徐々に押されていきました。

マークは何か無いかとポーチをあさりました。
「何か無いのか・・・食べ物とか」
マークはポーチのなかにキノコのようなものが3本入っているのに気づきました。
「なんだこのキノコ・・・こんなの持ってたっけ・・・」
マークが手にしたキノコは紫色をしていました。
「よし、コレを食って体力回復だ！」
マークはそのキノコを一気にたべました。
しばらくするとマークは立ち上がり、

「よし！オレ様復活だぜ！！」
そういってマークは銀竜と大将のほうに走っていきました。

大将のところにたどり着いた瞬間、大将の近くが爆発しました。
「ぎゃぁぁぁ、銀竜の野郎ブレス当てやがったな」
しかし銀竜は空中で爪を構えていました。
マークは爆死した大将を見つめていました。

後日談

爆発はソウルの仕業だったようです。
これを知ったとき、意地でも竜操術を覚えようとしました。
幸いマークが食べたドキドキノコが良い効果をもたらしてくれたため、マークは軽傷ですみました。

HUNTING　34　帰郷

マークはティナに竜操術を教えてもらおうとしました。
「たしかポーン村の村長さんは竜操術の達人ですよ」
「マジかよ！　よし、今からその村にいく！」

三日後

マークは村にきました。
「ここオレ様の村じゃん」
マークはバカだったので村の名前を知りませんでした。

「おーい、村長！」
マークは遠くから村長を呼びました。
しかし村長には聞こえていないのか無反応です。
「あの野郎！オレ様をシカトするってのか！？」
マークはそう叫びながら村長の近くに行きました。
「オイ！村長！！オレ様だ！」
マークは村長に声をかけました。
村長は、「おぉ、マークか。」といいました。
「帰ってきてやったぜ！聞きたいコトがあるんだ！」
マークはこれまでの出来事を思い出せる限りで話しました。しばらく話して、
「んで！竜操術を教えてほしんだよ！」
マークは結論に出ました。

村長の反応は、
「あん？　マークに教えるもんじゃねえよ」
マークはかなり厳しい返答を受けました。
「マジかよ！　ティナに教えたんじゃねぇのかよ！？」
マークは激怒して村長の胸ぐらを掴みました
しかし村長は至って冷静に杖でマークの腹に風穴をあけました。
「ぐふっ」
マークはあっさり力つきました。

翌日、マークはネコの手によって完治した体を見て立ち上がりました。
「あの村長に強くなったオレ様の凶悪さをみせつけてやるぜぇぇぇぇぇぇぇ！！！」
マークは吼えてクエストを受けにいきました。

村長のトコロに行きました。
「おい、なんかクエストはねぇのか！！」
マークは調子をこいています。
「これなんかどうじゃ？」
村長が見せてきたクエストは・・・
《特産キノコ7本の納品》
マークはしばらく黙っていました。

「てめぇ！オレ様を舐めてんのか！？」
マークは村長からクエストの書かれた紙を強引にもぎ取り、目を通しました。
「・・・・・・これだ！」
マークは一枚の紙に向かっていいました。
マークが大きな声で叫んだのでみんな集まってきました。
「これマークがやんのか、無理だな」
みんなはマークをバカにし始めました。
「うるせぇ！　オレ様はこいつを狩るんだ！」
マークは黒衣を纏って火山に向かいました。

「マークくんがねぇ・・・わたしたちでも厳しかったから」
「四人でギリギリだったからな、ライザ姐さん」
「確かにね、でもマーク君にはわたしたちには無いものがある」
マークが去った後、ライザとウェンが話していました。
「ヴォルガノス・・・奴は手強い・・・マークに勝てるか？」

HUNTING　35　さまよう鎧

「余裕だぜ！相手は魚だろ！？釣り上げて食ってやるぜ！」
マークは調子をこきまくって火山にいきました。

しばらくして火山に着きました。
「くそ！暑いな！！」マークは袖で汗を拭きました。
「まずは支給品だ。」
マークは支給品の箱を開けました。
するとマークは目を疑いました。
「えっ！？これって！まさか！！」
音爆弾がありました。
「なんだ、これ？」
やはりマークはバカでした。

烈火の海にたどり着いたマークは釣竿とカエルを構えました。
「ガノトトスのように釣り上げてやるぜ！」
マークは昔ガノトトスを釣り上げましたが、水のレーザーを食らって死んだ経験がありました。
マークはガノトトス攻略法を頭にたたき込んできました。
「よし、釣るぞ！」
マークはカエルを溶岩の中に投げ込みました。
ジュッという音と共にカエルは跡形もなく消え失せました。

「バカな・・・！カエルが・・・！！」
マークは溶岩を見つめていました。
「カエルが使えないんじゃ釣れないな・・・
こりゃ出てくるのを待つしかないか・・・」

マークはそう思いクーラードリンクを飲み、歩き出しました。
しばらく歩いてマークは呟きました。
「クソ・・・いねぇじゃねぇか・・・」
マークが2本目のクーラードリンクを飲もうとしたとき後ろの溶岩に巨大な何かがありました。

それは鎧竜グラビモスでした。
「ちょ、おい、ヴォルガノスじゃねぇのかよ！？」
マークは撃ってくるグラビームを避けながら叫んでいます。
「てかヴォルガノスどこだよ！？」
マークはついに転んでしまいました。
グラビモスがグラビームを撃とうとしたときでした。
凄い速さで何かが飛んできてマークをさらっていきました。

「マーク、無事か？」
「マークさん！？」
聞き慣れた声を聞いてマークは目を覚ましました。
「カオス、ティナ・・・何故ここに？てかここ何処？」
ここは空でした。

今、マークら三名、蒼と銀の竜の上にいます。
「あのさ、今更だけどなんでノーマルカラーのレウスだけいないんだろ」
「それは作者の策略だよ」

三人はそんな話をしながらヴォルガノスを探しました。

しばらく飛んでいるとマークが溶岩の中に何か長いものがあるのを見つけました。
「おお！あそこになんかある！ヴォルガノスか！？」
マークは戦闘態勢に入りました。
「よし！降りろ！！」
マークはレウスたちに指示しました。

ＨＵＮＴＩＮＧ　３６　火山に立つ二人の戦士（前書き）

今回はこの小説最長の長さです。
といってもやはり短いですが。

HUNTING　36　火山に立つ二人の戦士

マークら三名は溶岩の側に降り立ちました。
するとマークたちに気づいたらしくガノスは飛び出してきました。
「無駄にでけぇぇぇ！？」
その巨体は溶岩で覆われていました。
ヴォルガノスは尻尾を振り回すのでマークたちは近づけません。

すると、上空から隕石っぽいものがふたつ落ちてきました。
それは魚竜の背に当たりました。
マークたちが上を向くと、そこには蒼と銀の竜がいました。
「おうお前ら！！コイツを焼き尽くせ！！」
マークはそう指示しました。
するとその隙を逃さなかったヴォルガノスがマークに尻尾を叩きつけました。
「ぐお！？　うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
マークは溶岩のほうへ飛ばされました。

「フッ、燃え尽きたぜ」
マークは溶岩にダイブしました。
すると後１ｍ程のところで先ほどのグラビモスがでてきました。
マークは鎧竜の背に乗ってとりあえず一命を取り留めました。
「あぶねぇ！主人公なのに死ぬとこだったぜ！」
既に何回も死んでいます。

グラビモスはマークの存在に気づき振り降ろしました。
「ぐばあ！」
マークは地面に叩き付けられて吐血しました。
血を流して倒れているマークに更なる追い打ちがかかりました。

マークは目をあけると上にはヴォルガノスがボディプレスをしていました。

「うぎゃあああああ、重い！！重い重い！！」
マークがガノスに潰されています。
「うぅぅぅ・・・そろそろ死ぬ・・・」
マークがうめき声をあげています。
しかしカオスとティナはグラビモスに苦戦しています。
そのときマークは最後の力を振り絞って叫びました。
「どけぇぇぇぇぇ！！」
マークがそう叫ぶとなぜかガノスは立ち上がり、溶岩の中に帰っていきました。
「ふぅ・・・死ぬトコだった・・・」
マークはしばらく動けないでいました。

起きあがるとグラビモスがビームを撃ってきました。
「いきなり！？」
マークはグラビームを何とか避けました。
その隙にカオスはマークを狙うグラビモスの尾を断ち切りました。
「死ね死ねふはははははは！」
マークはもがく鎧竜を見下していました。
その刹那、ティナが声をあげました。
「マークさん！危ない！」
マークが振り向くとヴォルガノスのブレスがすぐ側まで迫っていました。

マークは久々に猫に運ばれていました。
「マーク、無事か？」
マークが立ち上がると側に人がいました。
「マーク、溶岩竜を消しにいくぞ・・・」
この冷たい口調は聞き覚えがありました。
翼を持つ赤いフォルムの鎧を纏い、背には双龍剣【天地】を背負っています。
「ウェン・・・何故ここに？」
「気にするな、速く狩りにいくぞ」
ウェンは一瞬振り向くと烈火の岩山へ駆けていきました。

「いた！あいつだ！」
マークが武器をかまえてガノスに接近していきます。
「うぉぉぉぉぉぉぉ！」
マークは思い切りガノスに足に剣を振り下ろしました。
ガノスの足から血が噴出しました。
マークは調子にのり足を切り刻みました。
「うぉぉぉ！！死ねぇぇぇ！！」
ガノスは横転しました。
そこにウェンがやってきて剣をかまえました。
ウェンは転倒したガノスに乱舞を始めました。
溶岩地帯に巨大魚のうめき声が響きわたります
「散れ・・・ヴォルガノス・・・」
ウェンは脚を切り刻んだ後腹に潜り込んで突き刺しました。

それで怯んだガノスは数歩後退しました。
「止めだっ！」
マークの横薙でヴォルガノスが死んだと思いきやよろめきながら溶岩に逃げていきました。
「・・・逃がすか！」
ウェンが飛び跳ねて十字に切りつけました。
ヴォルガノスは空中で力を無くして落ちてきました。
「・・・討伐完了」
「ザコがふはははははは！！」
こうしてヴォルガノスを狩ったのでした。

後日知ったことですがウェンとマークが猛攻をしている間、ティナとカオスは暇だったのでトランプをしてました。
ちなみにそのときの回想、

「勝ったな、ハートの２！」
「大富豪では負けませんよ、ジョーカーです！」

カオスはこのままAのトリプルを出されて負けました。
「42連敗か・・・俺弱いな」
「生まれてからじゃんけんと大富豪だけは負けたことありませんから。イカサマされても何故か負けません」
カオスは敵の悪さにため息をつきました。

カオスが57連敗したところでヴォルガノスが散りました。
「・・・討伐完了」
「ザコがふはははははは!!」
マークたちが歓喜の声を上げている間、カオスはティナの強さに嘆いていました。

「てかこの時代にトランプあんのか?」
最初から気づいていたウェンはそう呟いていました。

HUNTING　37　現れた謎の龍（前書き）

オリジナルの龍がでてきます。

HUNTING　37　現れた謎の龍

村に帰ってきたマークは村長に言いました。
「おい！ヴォルガノスを倒したぞ！」
村長はかなり驚いていました。
「やっぱオレ様って狩りの才能あるんだなぁ！！」
マークは調子をこいていいました。
村長が「おぬし一人で倒したのか？」と聞くと、
マークはちょっと黙って
「おう！当たり前だろ！！」といいました。
村長は凄く驚いていました
「驚いたか！」

「・・・誰が狩りの才能があるんだ屑が」

マークが振り返ると鬼の様な顔をしたウェンが立っていました。
いや、「鬼の様な」ではなく、「鬼そのもの」でした。
剣を両手に構え、背には赤いオーラがありました。
「あのトランプやってた輩と俺の助けがあっただろうが！」
ウェンが叫びながら剣を振り回してきました。
「ふっ、オレ様がギルドナイツということを知らないな、お前は！」
マークは常備している短剣を投げつけました。
「・・・知るか！」
ウェンはそれを両断し、黒龍の角のような方の剣を投げてきました。
それはマークの腹に刺さると龍毒をまき散らしてマークの体を汚染していきました。
「ぐふっ」
マークは力尽きました。

気がつくとベットの上に寝ていました。
「ここはどこだ？」
マークは辺りを見回し、
「あぁ、オレ様の家か・・・」と呟きました。
マークは何故ここに居るのか覚えていませんでした。
（腹がいたい・・・）
マークはそう感じて腹を見ると傷跡が残っていました。
「うぉ！なんだコレ！！まさか村長に！！」
マークはウェンにやられたコトをまったく覚えていませんでした。
「クソネコ！　またテキトーに治療したな！　死ね！」
マークはかなりキレていました。

マークは村長が竜操術を教える気配がないので街に戻ることにしました。
「覚えてやがれ、クソジジイ！」
マークはそう言って走り去っていきました。

走っている途中マークはあるものを見つけて立ち止まりました。
「なんだアレ・・・光ってるぞ」

マークが近づいていくとそこには光を浴びて光っている赤い球体がありました。
「なんだコレ・・・丸いな」
マークはその球体がとてもキレイで気に入ったので家まで持って帰ることにしました。
帰るとき、やたらと他人の目がこっちを見ている気がしました。
家に着いたマークは球体をベッドの上に置きました。
「ふぅ・・・なんかよくわかんないけどいいモノ拾った」

球体を拾ってから三日。

「マークさん、大変です！」
「どうした、落ち着けよ」
いつも冷静なティナが焦っていたので落ち着かせました。
「マークさんの拾った玉、あれ〈血龍の宝玉〉でした！」
「血龍？聞いたことねぇな」
マカオは玉を眺めながら言いました。
「そりゃそうですよ。伝承にも残されないほど・・・いや、残したくもないほど殺戮好きな龍ですから！」
「じゃ、何で知ってんだよ！」
マークはティナに言いました。
ティナは宝玉をみて「それ・・・今すぐ捨ててください」と言いました。
「だから何で捨てなきゃいけ・・・」

ドガーン！！

マークの声は轟音で消え去りました。
そしてマークの背後には深紅に染まった龍が立ち尽くしていました。

「マークさん、最後に宝玉持った人が狙われます！　幸運を！」
マークはティナに見放されました。

HUNTING　37　現れた謎の龍（後書き）

そろそろ終わりが近いです。
第一部のですが・・・。

HUNTING　38　生け贄と殺戮

マークは逃げ回っていました。
「あいつ何だよっ！」
血龍は手に付いた突起を振り回して襲いかかってきます。
その突起物は赤黒く染まっていました。
間違いなく、血です。
ちなみに奴の大きさは覇竜×3÷2ってとこなので街が崩れていきます。

「死ねくそ！」
マークは隙が出来れば短剣を投げつけていますが対人用に作られたので威力は弱いです。

「血龍ジェノファイスはどうかの～？」
奇妙な声が聞こえたので見ると何故か山菜ジジィがいました。
「なんだよその名。」
「サクリファイス（生贄）＋ジェノサイド（殺戮）。奴にふさわしいじゃろう？　ちなみに今の生け贄はお主じゃ。」
マークは焦りました。
「オレ様が生け贄かよっ！？」
マークが余所見をした途端、
「うわっ！ぎゃあぁあぁぁぁぁぁ！！」
ジェノファイスの攻撃がマークに炸裂しました。
マークは跳ね飛ばされました。
宙に浮いているマークにジェノファイスが口を開けました。
「ヤバッ！ブレスか！？」
実はブレスではなく、普通に咬みついてきました。

「ぐあっ！？」
マークは手足を咬みちぎられ半殺し、いや９０％殺し状態でした。
マークは虫の息でした。
そのままジェノファイスに串刺しにされ、マークは力尽きました。

目が覚めたら手足が戻っていました。
「夢か・・・」
ふと、腕をみるともの凄い縫い目がついていました。
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！なんだコレは！！」
マークは自分の手を見て驚きました。
「え！？夢じゃないの！？ジェノなんとかに咬まれた痕！？」
マークは外に出てみました。

「ん！？何もない・・・」
マークが外に出るとそこにはなにもありませんでした。

LAST HUNTING 芽生えし復讐心（前書き）

一応、第一部の最終回です。

ＬＡＳＴ　ＨＵＮＴＩＮＧ　芽生えし復讐心

ホントになにもありませんでした。
何事もなかったのではなく、なにもなかったのです。
つまり、

街が消滅していました。

「マジかよ、ありえねぇ！？　ＭＨでガ〇ダムが使えるくらいありえねぇ！？」
マークはパニック状態でした。
「はっ、ティナとカオスは！？」
マークは彼らを探しました。
マークは自分の首飾りに紅く煌めく宝玉がついていたことは気づいていませんでした。

しばらく探しましたが二人はいませんでした。
「あいつらドコに・・・」
マークはあの龍が壊滅させたのだと気づきました。
「あの龍の仕業か・・・」
マークは自分があんなモノを拾ったからこんなコトになったのだと

思い、後悔しました。
マークは再び探しはじめました。
しかし人の姿はなにひとつ見えません。
「どうなってるんだ・・・」
しばらく歩いてマークは首になにかついていることに気づきました。

「これは、血龍の宝玉！」

なんとまたついていたのでした。
「くそっ！！あの龍め！！次来たら、オレ様はあいつらの敵を討つ！」
マークはそう思うと涙が溢れてきました。
「どうしよう、これから」

マークは生活のほとんどをジェノファイスに奪われ、大切な仲間を二人も失くし、生きる気力を失くしていました。
「そういえば銀竜とソウルは何処に行ったんだろう？」
マークは気になったので奴らを探し始めました。

丸一日探したところで諦めました。
「はあ、あいつらまでいなくなっちまった」
マークはなくしたものリストに銀竜と蒼竜を追加しました。

マークはやることがないので旅に出ました。

もう、マークを突き動かすものは、

血龍への復讐心だけでした・・・。

ＬＡＳＴ　ＨＵＮＴＩＮＧ　芽生えし復讐心（後書き）

ものすごくバッドエンドです。

今原作の方で二部を書いている途中ですので、できたら又書き始めます。

二部では番外編２の主人公もでてきます。

最後になりましたが、読んでくれた皆さんありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4708c/

マーク狩猟記

2010年10月11日04時08分発行